



テーマ 一人一事例発表会



▲大切な方への、毎朝のお勤め

一人一事例

サンビレッジ新生苑 施設長 太田 澄子

サンビレッジ新生苑にも、その周辺地域にも介護を必要とする高齢者が多数おられる。病気やその後遺症のためやりたい事が自分で出来なくなつた方々の生活を専門的にお手伝いするのが「介護」である。ある人はもうすっかり諦めていた料理を、ある人は麻痺のため諦めていた将棋を、毎日行っている内に笑顔で楽しめるようになった。「せめて排泄ぐらいは自力で」との願いに、排泄間隔を記録し、その記録からトイレへお誘いする内にオムツをはずすことが出来るようになった。「こうありたい」と生き抜くひとり一人の人生が介護の専門性を引き上げる宝の山となつていく。

「高齢者自らの障害を障害としないで「最後まで人として生きる」為のそれぞれの援助方法を毎年全職員が一人一事例として纏め、皆で共有し学び合っている。優しさだけでは担えない介護を学問として築き上げていく為に…。」

優秀賞

痴呆性高齢者と住環境

グループホーム弥生リーダー

岡村恵美
井上佳代

高齢化の進展に伴い、痴呆症を患う高齢者も増加の一途をたどっています。厚生労働省もこれまでの身体ケア中心のケアモデルから、痴呆ケアモデルへの転換を検討しています。数年前より、痴呆ケアの在り方としてユニットケアやグループホームケアが注目されています。これらのケアは痴呆高齢者とスタッフが擬似家族となり、家庭的な雰囲気の中で痴呆性高齢者個々が役割を持ちながらその方らしく生き生きと生活し、痴呆症に伴う行動障害を軽減していくことを目的としています。



▲ゆったり、のんびりした「ホウキ草の道」

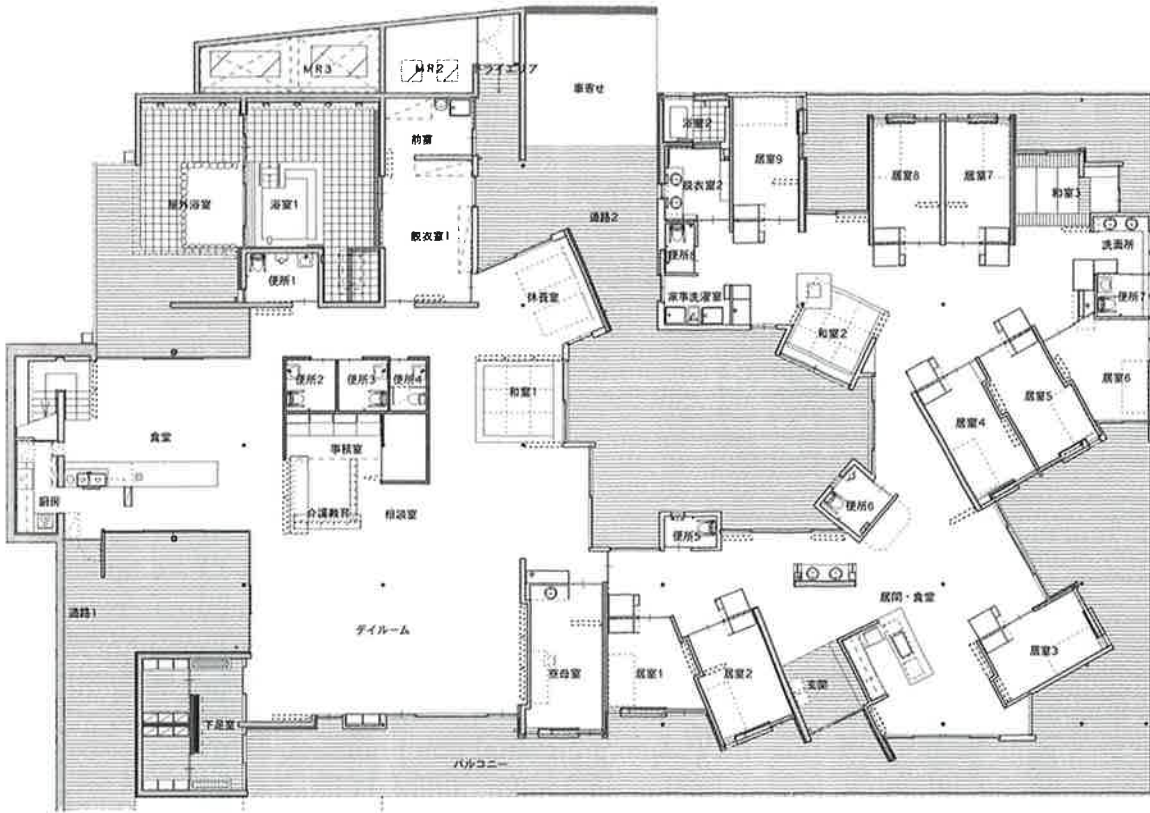
さて、痴呆性高齢者にとって安心できる住環境はどのようなものでしょう。痴呆症を患うと中心的な症状として、記憶できない障害(記憶障害)や物や場所が分からない障害(見当識障害)が

出てきます。これらが原因で、痴呆性高齢者特有の不安や混乱、行動障害が起きます。これまでは不安や混乱を避ける為に、部屋から二歩出たら食堂やトイレ等生活に必要な場所が見渡せる環境が望ましいと考えられてきました。しかし、このような見渡せる環境は、言い換えれば他人からも見られる環境でもあり、常に人目にさらされた落ち着かない環境であるとも言えます。一般家庭でも玄関を入ったら全てを見渡せる家は皆無でしょう。利用者の側に立ち生活を視点に置いた時、見渡せない環境がプライバシーを確保され安心できる環境でもあるのです。

この分かりやすいが、プライバシーも確保するという一見矛盾する課題を新築の建物においてどのように両立させれば良いのか、昨年度開設したグループホーム弥生が挑戦しました。設計の段階では設計のプロと介護のプロが、弥生で日々繰り返しられるであろう生活シーンから部屋や共有スペースの配置の検討を繰り返し、模型を作成したり見学にも出掛けたりしました。結果、弥生は中庭を挟んでコの字



▲弥生内でも、季節を感じながら…



▲弥生、ちやぼぼ平面図

型の建物の中に、斜めに部屋やキッチン、居間が配置されています。また部屋の外

見通しが利かない迷路のような家です。しかし、ここで暮らす利用者は時には協力し合い、

時には一人でゆったり穏やかに過ごしたりと、それぞれの生活を楽しんでおられます。ある程度痴呆が進んだ高齢者でも、部屋の認識が出来ています。これは、食事や家事、趣味、就寝といった生活シーン毎に空間が区切られており、その空間で過ごす間の必要な機能が兼ね備えられていることに起因しています。またこうしたハードを有効に生かしているけるよう、飾り棚の活用の工夫や誘導等のケアスタッフの介入も当然ありました。

(弥生:n=9)

痴呆度	軽度		中度		重度	
	I	II	IIIa	IIIb	IV	M
認識有	2	2	1	4	0	0
認識無	0	0	0	0	0	0

(すずらん棟:n=26)

痴呆度	軽度		中度		重度	
	I	II	IIIa	IIIb	IV	M
認識有	0	2	2	1	1	0
認識無	0	0	1	2	9	8

※痴呆度Ⅲレベルを分岐点に居室認識に差異が認められる。

ことと考えます。最後にこの弥生とサンビレッジ新生苑のすずらん棟利用者の痴呆度と居室認識についての表を掲載します。

平成15年度事例発表

優秀賞

◆グループホーム弥生
痴呆性高齢者と住環境

岡村恵美 井上佳代

2席

◆厨房

ソフト食提供への取り組み

「やっぱり形がある方がおいしいわね」

坪井治江美

3席

◆グループホーム木もれびの家

凛と生きる

「誇りを表現し認め合う時」

渡辺浩見

特別賞

◆すずらん棟

痴呆性高齢者の感情反応と

ケアの質の関連性

田中広美・植村純子・玉城栄之助

カトリア棟

あきらめない可能性を

「車椅子で無為の日々からソップ洗いの主婦業へ」

小川知美

ホームケアサービス(在宅復帰)支援する

「利用者本人・家族・専門職の連携」

北川美穂

生きものがある生活

杉岡徹哉

安心につながるケア

佐々木愛

日常生活での自立支援

藤田信子

統ケアの必要性

「トラブルの裏側にある思い」

河田裕子

テューリップ棟

信頼関係で生まれた私たちの介護

「利用者あつての私たち」

平松寛恵

利用者を変えた「専門性」と「老人力」

「おりものの臭いを消した介護の力」

青田登子

選択肢を用意しNOと言わない介護

「電動車椅子がもたらした普通の生活」

樋口裕子

本来の表情に戻るまで

小羽大輔

生活に張りを与え、

楽しみのある生活を過ごすために

稲場由美

食事

所智明

利用者に生活を返す(クッキング)

国枝光子

本人が納得される対応

「安心した生活が送れる為に」

小澤三紀

バラ棟

いつまでも人との

つながりのある生活を

「学生との交流を通じて」

金内啓子

自分らしい生活を再生できる場所

「回想法「珈琲倶楽部」から得たもの

宮本あゆみ

他職種との連携と統ケア

小川真理

コミュニケーションを通じて
学んだこと

高木美和

離床がもたらした効果

渡辺千尋

安心して生きるとは

酒井義隆

すずらん棟

ユニットケア「望」での食事

矢島瑠利子

各専門分野からの

早期アセスメントの必要性について

美野善則

体調の変化を通して学んだこと

高木美保

その人らしく生活することを目指して

「他職種で支え合いながらめざす介護」

熊谷美穂

個と向き合うケアの中で

横川綾子

デイサービス

利用者に合わせた短時間からの提供

柿田良子

その人らしく豊かな生活を

「徘徊者の対応への取り組み」

小川敬子

人との関わりから生活への意欲を

「デイサービスの利用が

高木晶子

日常に近づくために

「排泄に拒否のある利用者に対するアプローチ」

川瀬亜由美

グループホーム木もれびの家

ケアの専門性と質について考える

小宮山潤

青木好美

事務所
返戻ゼロ会議の成果

樽見幸子

アウトビイティ

身体的重度になつても

生きがいを持つて

井深千桃生

音楽を通じた関わり

堀敬子

作業療法部門

生活レクリエーションによる変化

酒井里美

医務室

疥癬及び疥癬の

疑いのある利用者へのケア

医務室スタッフ

「あきらめないで良かった。」

「勤めながらも在宅介護を両立」

「ホームケアサービスを利用して」

「生活リハビリテーションの効果」

桜田りえ

新規事業開設に伴う事業推進

広瀬京子

デイサービスちやほほ

自立支援に向けた取り組み

「生活リハビリテーションの効果」

若原邦弘

事例発表は、毎年各部署の職員が、年間を通して取り組んだ事例の中から、代表者が決まり発表をします。

そして、全職員の投票で各賞が決まります。また、今年度は特別賞も選ばれました。